

山形の

芸術

祭

GALLERY



代表取締役
世林陽子さん

創業百年を超える
「長門屋」目を引く
城の形で知られるが、その敷
地内には寺院の本堂になってい
る蔵と庭園。そのほか2つの
蔵があることを知る人は少ない。

それ
「ひなた蔵」は、長い間、
漆器や仏壇の保管場
所として使われていたが、現在
の代表である世林さんへの代替
わりをきっかけに、中を整理し
改修を始め、人が集えるスぺ
ースに生まれ変わった。現在は店
舗の環境を生かし、仏壇や和
のある暮らしを提案したいとの
想いから、和の文化を楽しむ写
経や写仏などのワークショップ
が定期的に開かれる場所になっ
てきているほか、地域活動のために
提供されている。

「ひなた蔵」(蔵下)を開放したことで、
阿弥陀如来像が安置されている敷地
内の慈光明院の存在を知る人や、店
内を訪れる人も増えたという。



長門屋
山形市七日町1-4-12
☎023-622-2204 ◎9:30
~18:00 ◎1月1日、3日
<http://oshironomise.com>



ワークショップで作られたオリジ
ナルの提灯(上)と、当時の
ワークショップの様子(左)。

広がる縁を大切に
老舗仏壇店の試み。

今回のイベントで「ひ
なた蔵」は、映像作家
写真家の茂木綾子氏
の映像を上映し、映像詩を展
示するスペースとなる。
「私たちがこの場所の使い方を
模索していて、どんなことがこ
の場所にマッチするか、いろん
なことをしてみたい気持ちがあ
りました」と、スペース提供の背
景を話す世林さん。「また、過
去のビエンナーレのイベントで、
文翔館が今までの印象を覆す
場所になっていたのが驚きで、
ビエンナーレは街の見えかたやイ
メージを変えてくれるものだど
感じましたね」と当時を語る。
「仏壇店は、用がないと入りつ
らい雰囲気があると思えますが、
蔵の開放によって気軽に足を運
んでくださるかが増え、いまま
でになかった「縁をいただいてい
ます。今は塗蔵をリノベーション
中で、新しい活用を考えてい
るところです」とのこと。従来
のイメージにとらわれない発想
で、人の輪が広がり続けている。

リノベーションで
意識の向かい方を変える。

山形の街を舞台に、
アートイベント「目白押し」。
2014年にはじめて開かれ
た、みちのおくの芸術祭「山形
ビエンナーレ」。丸ごと1ヶ月を
使って山形の街にさまざまな仕
掛けを施し、ハード面でもソフ
ト面でもアーティストワークに染
めてしまおうという。2年に一度
のお祭りだ。
世界で活躍するアーティスト
や作家たちが集中して来県した
り、山形にいながらにして、本
物に触れたりする機会が持て
るのも魅力のひとつ。今年は結
合プロジェクトに、日本屈指
のアートディレクターで東北芸
術工科大学学長でもある中山
ダイスケ氏が、芸術監督には山
形市出身のアーティストで絵本
作家の荒井良二氏が就任し、
企画展やトークショー、音楽
パフォーマンスなどといった、ク
リエイティブな世界が繰り広げ
られる。
すでに動いている
街の表情を覗いてみよう。
「山形ビエンナーレ」の開催や、
それを主宰する東北芸術工科
大学の多角的な活動が刺激とな
って、山形の街の表情は変わ
ってきている。今回の特集で紹
介するのは、そんな街や人びと
の動きだ。芸術、アート、クリ
エイティブといった創造世界は、
観た人や体験した人の心のス
ワッチを押し、気づきを与える。
その気づきが後押しとなって、
街じゅうに散りばめられたア
ートのエッセンスはあちこちで輝
きはじめている。その一粒ひと
粒が、どんな風に私たちの暮ら
しに愉しさをもたらしてくれる
のか、3回目となる「山形ビ
エンナーレ」の開催を前に、誌上
散策してみたい。

「山形ビエンナーレ2018」がもうすぐはじまる。
山形に新しいアートとの関わりが生まれて6年、
街の表情はこんなにもオモシロく変わっています。



2016年、2回目の山形ビエンナーレのクローズングイベントとして最終日に文翔館で行われた、いしいしんじ氏による「その場小説」。
いしい氏が即興で小説を書き、それを受けて荒井良二氏がカラフルなアートを、作曲家・鍵盤ハーモニカ奏者の野村誠氏が音を奏でた。